不自由の中の自由、または読書

田所　金久

「恩送り」と読書

「諸法無我」という仏教用語は、人は1人では生きていけず支え合って存在するという意味である。この年まで支えられ生きてきた私も、もう「恩返し」をしなければならない歳である。しかし、作家の井上ひさしは、恩返しではなく、「恩おくり」が必要だという。ボランティアのように、困難な人に手を差し伸べ、社会を良くすることが必要だと語っている。では足腰を痛めて不自由な体になった私に何ができるのか。

家庭菜園にも取り組めず、諸集会への参加もままならなくなり、「暇」という豊かな時間は増え、読書やテレビを見たりする時間が多くなっている。不自由である。しかし、読書などは私の精神を自由な豊かなものにしてくれる。

もともと新聞は2紙、雑誌は「世界」と年刊「年論21」「アジェンダ」を購読している。「前衛」「経済」は不定期に。新聞は高齢社会化を反映してか健康関係の広告が多くなり、「読む」ことが多くなった。

小説は推理小説以外はあまり読まないが、新聞の歌壇・俳壇は丁寧に読み心を打たれることが多い。雑誌は、いずれも簡単に読み飛ばせない論文が多く思考を深めてくれている。「議会と自治体」の2019年度予算分析にも学ばされた。これらをもとに「9条の会　土佐市」の学習につなげていきたい。

5月3日は9条の会の総決起の日である。

本の購入はアマゾンの通信販売を中心に利用している。これは書店にもない本が送料無料ですぐ購読できる確かに便利である。

日本はモノからサービスへ価値が移っていたのに、モノ中心の発想から抜け出せず、インターネットという時代の潮流に乗れなかった。アメリカのGAFEと呼ばれる4社、中国のBAT3社に対抗できなくなってきている。

書店に立ち寄り、色々な本に接したいが、それがかなわない今、通信販売は便利であり、私の精神生活を支え、自由をもたらしてくれている。

古代インドでは高齢者を林住期・談林期として、もう社会的貢献は必要無いとしたが、現代社会ではそれを許さない。私が「恩送り」と考えているのは、安倍政権を倒す力を身につける理論的、思想的な力に貢献することである。現在の青年は保守的となり革新は背を向けていると言われる。それは将来に夢や希望を持てないからである。私たちは、将来の社会に夢を持てる政策を提起し実行できる力を身につけなければならない。

「未来社会」への歩み

かつては社会主義・共産主義が未来社会として熱く語られた。しかし、ソ連崩壊後、日本ではその言葉は「死語」となってしまっていた。しかし、2018年はマルクス生誕200年にあたる年であり、その未来社会主義論が追求されるようになった。そこで私も次のような本を読んでみた。

山田敬男・萩原伸次郎など「21世紀のいま、マルクスをどう学ぶか」、聴濤弘「200歳のマルクスなら　どう新しく共産主義を論じるか」、不破哲三「党綱領の未来社会論を読む」・「資本論のなかの未来社会論」。

これらと合わせて現代的課題である9条問題にかかわる渡辺治「戦後史の中の安倍改憲」、東南アジアについて考える石井公成「東アジア仏教史」、吉田裕「日本軍兵士～アジア・太平洋戦争の現実」、栃谷行人「世界史の実験」など。

農業・農協問題を扱った小林泰信「隠れ共産党宣言」も興味深い。農家に生まれ農村で育った私は農業問題に興味を持っていた。大学を卒業したとき、これからの研究課題は地方自治と農業問題だと決めた。教師となった時、社研部をつくり農村調査に取り組んだ。「農業を基幹的な生産部門」とする綱領を持つ共産党を支持し、農協など様々な組織・運動との提携に未来を展望する優れた本である。高知工業高校創立者の竹内綱は「工業は国富の基」と言ったが、同時に農業もそうだと言っている。

これらの読書には多くの時間がかかったが、身体が不自由で時間にゆとりがある私には、初めにも述べた「不自由の中の自由」を与えてくれた。

「読む」といえば、高退協ニュース掲載の、宮川敏彦「『赤ちゃん会』を考える」には感銘を受けた。さすが高知県の障害者運動の先駆者であると思った。

畑では私に代わって娘夫婦が栽培した玉ねぎ・ニンニク・白菜などが青々と育っている。

図書館をめぐって

今まで読書について述べてきたが図書館の役割は大きい。経済的理由もあり、今は図書館を利用する人は多い。図書館は公民館と共に生涯学習の拠点であり、自治体には設置が義務付けられている。地方議会にも義務付けられている。議員が主体的に学べるためである。図書館は文化とまちづくりの拠点である。知事として鳥取県庁内に県立図書館の分室としての図書館を作った片山善博の「地方自治と図書館」には副題として「知の地域づくり」地域再生の切り札」という副題がついて、第一部「図書館は民主主義の砦」の第1章　「知的立国の基盤としての図書館」で知的立国（科学技術立国・文化芸術大国・透明で清潔な政治）をささえる人材を育成すると述べている。雑誌「世界」（2019・4）に「地域をつくる図書館」という論文が掲載され、伊万里市民図書館と樽原町の図書館が紹介されている。

「地域の地方化」に抵抗して

「地域の地方化」という用語は、国民教育研究所で指導的役割を果たした、世界史研究者・上原專祿が使った日本の政治に対して警告を発した言葉である。私はテレビ番組に多い「ローカル鉄道」という言葉にも、都市からの「上の視線」として抵抗を感じるが、地域とは「そこで学び、働き、暮らし、連帯して闘い、健やかに老いる場所」である。文化が遅れ都市に従属する「地方」ではない。

先述した「世界」になる町の意欲的な図書館」として2018年オープンの「ゆすはら雲の上図書館」が紹介されている。この図書館はまさに「地域の地方化」に抵抗し、地域を育てていく施設である。私は先日、この図書館を家族と共に見学に行った。

隈研吾設計、地元の材木を91%使用、隣接する福祉施設や子育て支援センターと提携し、話題を呼んでいる。木のぬくもりを感じてほしいから館内には靴を脱いで上がる。この図書館の真骨頂は本の並び方にある。普通の分類ではなく、48文字に依っている。「い」は「樽原の風を感じる～風土・風景」、「ろ」は「高知から四国へ」、「は」は「龍馬の「今一度洗濯・・・」とつづき、高知→四国→日本という流れである。土佐藩から脱藩した志士と関連させ、脱藩・脱原発・脱開発・脱都市・脱成長・脱ダムと言うように「脱」が並ぶコーナーもある。

私が属する土佐市郷土史研究会は19年4月、この樽原・津野山郷へ研修旅行で訪れる。その資料として磯田道史の「龍馬史」により、「龍馬について考える」という文書を書き、機関誌に掲載予定である。なお、雑誌「樽原」の41号には、教諭採用から2年間樽原高校に勤務した高知短大名誉教授刈谷仁さんが次のように述べている。「当時はいわゆる辟地任用で、樽原高校でも谷内純一（国語）、時久純雄（英語・故人）、尾崎治之（社会）、広瀬和子（黄護）ほか苦い教諭が大半を占めていて、教育方針をめぐる職員会議の討論は活気にみちあふれていた。

あらためて、原発と災害、自然との対話について

最後に、この文章を書いている2月11日は、涙をながし無情を感じながら、「こんな時だからこそ、歴史と憲法は私の友達」を書かなければあらなかった日である。事故処理の能力もないのに原発を経済成長の柱にしようとする安倍政権に心から怒りを感じ、山下正寿さんと幡多ゼミの取り組みに敬意を抱き続ける。10日は、授業で日教組製作のスライド「東京大空襲」を見せ続けた日である。人気番組「笑点」出演の三平さんのお母さんをいつも頭に浮かべる。体が不自由な私にも課題は次々と迫ってくる。可能な方法で「恩おくり」をしなければならない。

米国のアマゾンなど5社の株式総額は478兆で、トヨタの総額はアマゾンの5分の1、中国のアリババなど2社は1兆ドルで日本のトップ10社を飲み込む。しかし、株価時価総額の肥大化は、技術の優位性で生まれたのではなく金融による増幅である。

いま畑では青々と野菜が育ち、「ものづくり日本」の素晴らしさを感じさせてくれる。農業は基幹産業・「農業は国の礎」と。